

四国子どもとおとなの医療センター 骨・運動器センター部長 東野恒作氏

香川の 四国 最前線



◎ひがしの「JUN-K」1998年徳大医学部卒。同大付属病院や高松赤十字病院、高松市民病院などを経て、2014年10月から現職。日本整形外科学会専門医、同学会認定脊椎脊髄病医、日本リハビリテーション学会専門医、日本リウマチ学会専門医、日本脊椎脊髄病学会脊椎外科指導医、徳島市出身52歳。

重労働やスポーツ活動などが原因で起きる腰椎椎間板ヘルニア。手術治療には全身麻酔による摘出手術が一般的だが、近年では局所麻酔の低侵襲手術も行われ始めている。四国子どもとおとなの医療センターの骨・運動器センター部長を務める東野恒作氏に最新の知見を聞いた。

— 腰椎椎間板ヘルニアとは。 —

椎間板は背骨(脊椎)一つ一つの間にあり、クッションの役割を担っている。髄核という軟らかい組織と、それを包む線維輪という組織でできている。繰り返し重たい物を持ちたり、激しく動いたりすると大きな負担が掛かって線維輪が壊れ、軟らかい髄核が湧出し、時に外に飛び出す。腰部や頸部で発生することが多いが、特に腰部で起きるのが腰椎椎間板ヘルニアだ。

— 症状は。 —
腰椎椎間板ヘルニアが神経を圧迫することで、腰痛や脚のしびれなどの症状を引き起こす。重度の場合に放置すると神経症状が悪化して、歩行が困難になったり、排尿、排便障害になりたりする場合もある。

局所麻酔で低侵襲手術

高齢者にも治療可能に

— 治療法は。 —
まずは保存療法が基本だが、症状が改善しない場合は手術でヘルニアを摘出するのが一般的だ。従来は、筋肉を切開いて椎間板ヘルニアの周囲の骨を削る必要があったが、近年では背部の筋肉など体の組織をあまり傷つけずに摘出できる局所麻酔下の低侵襲内視鏡手術も行われ始めている。

— 特徴は。 —
これまでは全身麻酔が必要だったが、この低侵襲内視鏡手術では、術後の回復が早い局所麻酔で行うこと

- 腰椎椎間板ヘルニアに対する低侵襲手術のメリット
- 皮膚の切開は8mm程度
 - 局所麻酔で行う
 - 入院期間は2～4日
 - 筋肉や骨を温存できる

- 傷痕が目立たない
- 術後の回復が早い
- 早期の社会復帰が可能
- 術後の痛みが少ない

患者さんの肉体的、社会的負担を軽減できる手術なので、徐々に広まってくるだろう。私自身も日々研鑽を積みながら、実際に執刀しながら、他の若手医師たちを指導していきたいと考えている。

■ 四国子どもとおとなの医療センター 骨・運動器センター

腰椎椎間板ヘルニアの低侵襲内視鏡手術の実績は、直近の半年間で約10例。従来型の手術にも対応している。

所在地： 徳島市市仙遊町2-1-1
電話：0877(62)1000
<http://www.shikoku-med.jp/>

4日に短縮。復帰も早く、デスクワークであれば手術後5日～1週間出勤できる。また、皮膚は8mm程度しか切開しないため、手術痕がほとんど目立たない。

— 課題はどうか。 —
腰椎椎間板ヘルニアの全ての症例に適用できるわけではない。最悪の状態によるが、手術が可能なのは7～8割だろう。また、従来の手術とは患部へのアプローチが異なり、手技には修練が必要になる。特殊な器具を使用するため、対応できる医療機関はまだ少ない。

— 今後の展望を。 —
患者さんの肉体的、社会的負担を軽減できる手術なので、徐々に広まってくるだろう。私自身も日々研鑽を積みながら、実際に執刀しながら、他の若手医師たちを指導していきたいと考えている。